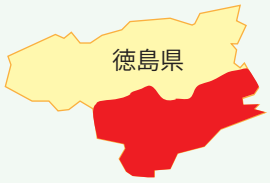
産官学民 協働の“極意”

～みなみから届ける環づくり会議をモデルに～

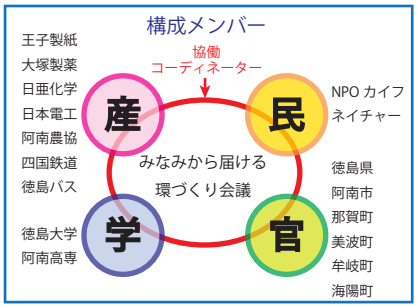
渡辺雅子[1)], 大田直友[1)], 鎌田磨人[2)], 澤田俊明[2)3)]

1) 阿南工業高等専門学校, 2) 徳島大学, 3)（有）環境とまちづくり



みなみから届ける環づくり会議

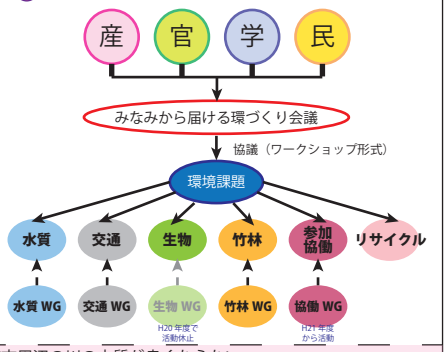
- 設立：2006 年 7 月 5 日
- 目的：①徳島県南の環境保全上の課題について分析、抽出する
  ②協働による実践的な活動を設定し、実施及び効果検証を行う
- 構成主体：事業者、行政、研究者、民間団体



会議のコンセプト

- **協働のメリット**を活かせる活動内容
  ＝行政の環境規制、企業や民間団体の環境対策などの個々に行う活動は対象としない
- 行政（県）は事務局に徹する
- ワークショップによる**合意形成**を基本
  ＝多数決による意思決定は行わない
  環境課題抽出、対応策、実施事項、役割分担はすべて合意のもと決定する
- **Win and Win** を目指す
- アイデアをつなげて**システムを構築**

会議の組織形態



プロジェクト決定の流れ

- 環境課題抽出→KJ 法
- 中心課題の決定
- 問題・目的分析→PCM 手法
- プロジェクト選択

中心課題とプロジェクト

- 阿南市周辺の川の水質が良くならない
  ⇒地域の方々との協働による水質一斉調査
- 地球温暖化の対策が個人レベルで進まない
  ⇒地球温暖化対策のための交通渋滞対策社会実験
- 水生生物の保護が進まない
  ⇒水辺の生き物のデータベースづくり
- 里山管理（竹林）が十分できていない
  ⇒拡大し続ける竹林をみんなで管理していくための枠組みづくり

活動成果

水質 WG：水質一斉調査

1）予備調査：2008 年 1 月 29 日：53 名参加
2）夏期調査：2008 年 8 月 4 日：576 名参加
＊「産」の環境測定室などを一般参加者へ開放し、測定コーナーを開設
⇒「みんなで作ったみなみの水質マップ」を新聞折り込みにて配布
3）冬期調査：2009 年 1 月 24 日：335 名参加
＊一般参加者の利便性を考え、まちなかにも測定コーナーを設置
⇒「知っていますか？わたしたちの水環境」を新聞折り込みにて配布
＊この活動の位置づけ：「気付き・知る」⇒「行動」への大切なステップ



交通 WG：交通渋滞対策社会実験

平成 19 年度

目的：時差出勤の効果を把握する
施策の有効性への「気付き」

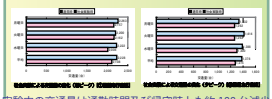
- プロジェクト検討・計画
- 事前調査
- 社会実験
- コミュニケーションアンケート
- 行動変化に関するフィードバック

★成果★
徳島県南部総合県民局が
H20 年度から時差出勤を導入

平成 20 年度

目的：モーダルシフトの推奨効果
施策の有効性への「気付き」

- 前年度の結果等を踏まえ検討・計画
- 社会実験
- 期間中・実験後アンケート実施
- 行動変化に関するフィードバック

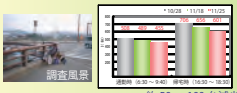


★成果★
日亜化学（株）が
自転車通勤者に対し報奨金制務導入

平成 21 年度

目的：経済的インセンティブの
導入・「気付き」

- 前年度の結果等を踏まえ検討・計画
- 社会実験
（ノー残業日のみ実施）
- 実験前・期間中・実験後アンケート実施
- 行動変化に関するフィードバック



★成果★
王子製紙（株）が
自動車手当支給内容変更を検討

環づくり会議の「強み」・「弱み」

-SWOT 分析を用いて強みや弱みを確認

表 1）強み

多様さ	・多様な人材、発想、価値観、業種 ・異分野のつながり ・幅広い情報交換 ・大きな展開ができる ・情報発信力が高い
結集力	・多様な力を結集しやすい
専門性	・専門的な裏付けがある（環境分野）

表 2）弱み

価値観	・活動への参加自由度が異なる ・組織が異なる
意見調整	・意見の調整が必要 ・即決断できない
継続性	・人の入れ替わりへの対応 ・共通認識、動機の持続性
体制	・活動支援体制やルールづくり ・情報ツールが必要
予算	・予算がない

＊多様なつながりや結集力を活かした**短期**的な**爆発**的活動

産官学民が連携する意義

	産	官（県）	官（市・町）	学	民	環づくり会議
社会的信用（交渉力）		◎	◎	◎		→◎
活動資金	○	△	△			
ビジョン・計画 リーダーシップ		◎	○	◎	○	→◎
情報集約・発信力		◎		○		→◎
持続性・地域密着性	○		○		◎	→△
専門性	○			◎		→◎
調整力・事務力		◎	◎			→△
評価力	○	○	○	○		→△

メリット
・各主体の弱点が補われ、単体ではできないことが実現できる
・お互いが良い外圧となり、前に進む（かも）
・交流が進み、信頼とネットワークが構築できる
・守備範囲が増し、様々な仮面をつけて資金申請ができる

留意点
・各主体の「長所」と協働体の「限界」を認識、共有する

＊自己評価：新しい枠組みにおける信頼とネットワークの構築⇒**社会関係資本**

見えてきた課題

- 継続性の確保
  ・事務局の確立
  ・新規、途中参加者へのケア
- 参加者意識の変化と差異
  ・協働の意義とメリットの認識（役割についての認識）
- 力の分散
  ・強み「爆発力」を活かす事業を
- システム構築後の広がり
  ・施策との連携
  ・「民」とのつながり

解決に向けて

- 事務局育成
- 関係者アセスメント、意見調整
- 運営に関する検討頻度を上げる（運営サイドの意思の疎通を図る）
- 「協働」先の発掘

協働コーディネーターの役割は重要 !!
「人材確保」も課題